
美的準実在論を擁護する

大石駿(京都大学)

美的判断論が説明すべきは、その判断がそれをおこなう者自らの快・不快の感覚に由来するという意味で主観的である一方で、判断が正誤あるいは優劣を問えるものだという意味で規範性をもつという、一見して相反する事態である。

分析美学における美的判断論では、美的性質についての反実在論と実在論が競合するかたちで、判断の規範性の内実についての妥当な説明が目指されてきた。そんな中、「美的準実在論(aesthetic quasi-realism)」という、S. Blackburn の道徳的準実在論を美学に応用した立場が生まれている(Todd, C. S. (2004). Quasi-realism, acquaintance, and the normative claims of aesthetic judgement. *British Journal of Aesthetics*, 44(3), 277–296.)。本発表は、この美的準実在論が、規範性の弱い美的判断と強い美的判断を統一的に説明できるという強みを持っていると主張し、その一貫性の観点から競合の理論に対する優位性を訴えるものである。

さて、美的準実在論が後ろ盾としている Blackburn の道徳的準実在論とは次のようなものである。まず「人を殺めるのは悪いことだ」という道徳的言明は、道徳的な事実を述べているのではなく、発話者の態度の表出だ。つまり、悪さという道徳的性質が実在するのではなく、あくまでこの言明はわれわれの「殺人は悪くていけない」という態度の現れであるという反実在論の立場をとっているのだ。では、これは単なる態度の表出であり、誰から見ても悪いという意味での客観性は持ちあわせていないのだろうか。そうではない。Blackburnによれば、「人を殺めるのは悪いことだ」という判断で表出されているのは二階の態度—つまり、「殺人は悪くていけない」という態度に対する肯定的な態度である。こう階層化することにより、道徳的言明が態度の表出という不安定なものであっても、二階の態度の安定性により、道徳的判断が相対主義に陥ることなく、あたかも道徳的性質が実在しているかのような客観的な語りをすることができるのだ。

これを美学に応用したのが美的準実在論である。たとえばある有名な傑作映画についての「映画Fは素晴らしい」という美的判断は、話者のFへの肯定的態度に対する肯定的態度の表出である。言い換えれば、一階の態度においては、規範性のない快の感覚を述べただけであるが、その感覚に対する二階の態度に規範性—みんなも素晴らしいと思うべきだ—があることで、「Fは素晴らしい」という美的判断は規範性を有するのである。

本発表では、美的判断には規範性の高低があること—すなわち、他人への同意をほとんど求めないような美的判断と、強く求めるような美的判断があること—を指摘したうえで、美的準実在論が、その根底において反実在論を取ることによって、その規範性の高低のグラデーションを十全に扱える理論になっていると主張し、種々の反論からの擁護を試みる。